

4 リンダ・リチャーズ来日直後の足跡

(一八八六年、横浜から京都へ)

岡山¹⁾ 寧子・依田²⁾ 和美

アメリカ最初の訓練看護婦であるリンダ・リチャーズ (M.A.J. Richards、以下、リチャーズ) は、京都看病婦学校での看護教育を担うため、一八八五年一月サンフランシスコを発ち、二四日目の夜に横浜港に到着した。彼女が初めて目にした日本の光景は回想記などに少し触れられているが、誰に会い、何を思いながら、どのような道程で京都に至ったかの詳細はそれほど明らかにされてはいない。ここでは、アメリカンボード宣教師文書リチャーズ書簡(以下、書簡)、リチャーズの回想記(以下、'回想記')、The Japan Weekly Mail(以下、'JWM')、Japan Directly(以下、'JD')などから、リチャーズの横浜到着から京都へ至る足跡とその間の彼女の日本体験を探りたい。

〔横浜到着から神戸へ〕

JWM. において、一八八五年一月二十九日サンフランシスコ発、一月二一日横浜着の City of Sydney 号 (American steamer) 到着者名簿に (1886, Jan. 23) と、一月二三日横浜発神戸長崎經由香港行き Teheran 号 (British steamer) の乗船者名簿 (Jan. 30) に彼女の名前がある。書簡によると、横浜到着の日は船内に宿泊、翌朝人力車にて、ルーミス氏邸 (Bluff, No. 222, JD) を訪問した。ルーミス氏 (H. Loomis) は長老派教会の宣教師で、訪問当時はアメリカ聖書協会日本支局主幹として活躍していた。彼の妻がアメリカンボード宣教師のグリーン氏 (D.C. Green) の妹であり、リチャーズとは旧知の間柄であったと思われる。また、ルーミス氏と親交があったヘボン医師 (J.C. Hepburn) にも会っている。彼は一八八三年日本プロテスタント宣教師全体会議での決議、「日本での看護教育の推進」に対して時期尚早と反対の立場をとっており、看護教育を指導するために来日したりリチャーズとのやりとりは興味深く、二人の間で日本や京都の諸事情、キリスト教伝道と看護教育の関係な

どが話題に上ったと推測されるが、書簡には「大変暖かい歓迎を受けた」と記されているのみである。彼女は訪問したその日の夜遅く、横浜を出発した。

「神戸から京都へ、そして上海へ」

書簡によると、リチャーズは横浜出発の翌日の一月二四日昼頃神戸に到着し、アメリカンボード神戸ミッションのジェンクス氏 (D.W.C. Jencks) 宅 (Hill. No. 80: JD.) に行き、一週間程滞在する。この間の出来事を見ると、二五日、神戸の女学校 (現神戸女学院) に携わるタルコット夫人 (E. Talcott) と共に日本人宅での集会に行く。婦人達との交流、日本風の挨拶、正座で日本茶を飲む経験をした。二七日、京都から看護学校設立準備に当たっているベリー医師 (J.C. Berry) の訪問を受ける。この時彼から京都在住の宣教師デービス氏 (J.D. Davis) 夫人の上海での静養に付き添うことを打診され、彼女は了承する。二八日の朝、京都でベリー氏と共に看護学校購入予定地を見学する。彼女はこの時、学校設立の実感を得ている。一方、ベリーの書簡には、同日、リチャーズはデービス夫妻と共に神戸に戻り、三一日、神戸を出発、

長崎に二・三日滞在后、上海へ向かうと記されている。

彼女の書簡にも三一日は長崎行きの船内におり、日本船なので小型で居心地が悪いと訴えている。また、五月頃まで滞在予定と記しているが、実際にはもっと早く戻っているようである。ベリー医師は、当初タルコット女史を付き添いにと考えていたが、リチャーズの来日により変更している。リチャーズはその要請を「神の導き」ととらえ、目的地京都にはほんの短時間滞在しただけで上海に立つ。

これらから、リチャーズには宣教看護婦として、看護教育だけでなく宣教師の健康管理への役割をも期待されていたことがうかがえる。彼女は上海滞在中も日本語を学びたいという希望を持ち、日本での看護活動や看護教育への熱意を示しているが、日本での看護教育に携わるのはしばらく後のこととなる。

¹⁾(京都府立医科大学医学部看護学科)

²⁾(前大阪府立看護大学医療技術短期大学部)